



双塔

カトリック新潟教会

2015年 7月

No. 326

歴史から学ぶ（一）

—— 信者になったことによって 使徒にもなった ——

主任司祭 ラウール・バラデス

人口減少、司祭不足により今の教会は少しずつ明治時代の状態に戻りつつあるという話をどこかで聞いたことがあります。それが本当であるならば、明治時代の教会の人々から学んで、この危機をチャンスに変えることが出来るかもしれません。

その際、推測だけでいいヒントを得ることは不可能に近いでしょう。

当時、日本の現代教会の基礎を据えた人々の声に耳を傾けることはいうまでもなく大切です。幸い、最近ネット上で歴史的な資料は公開されていて、パリ外国宣教会の多くの手紙も含めて無料でアクセスできるようになりました。その中に新潟と関連あるものの数は少ないけれど一つ一つは貴重な情報を伝えてくれています。

別のところでアンリ・アルムブリュステル神父のことを紹介しました[1]。彼は1870年に新潟を訪れた一番最初の宣教師でした。新潟に来る前に1868年4月13日に、函館からプティジャン神父宛にその地方の洗礼について手紙で報告しました。

「復活の祝いの中にモニクー神父は洗礼志願者の額に聖水を注ぎました。三百年もの間この地方には洗礼がありませんでした。以前、使徒、証聖者、殉教者を生んだこの国にとってこの出来事は素晴らしい実りをもたらすと期待できます。新信者は信者になったことによって使徒にもなったことをよく理解しています。」

二年後の記録によれば、1870年に日本国内では司教1人、司祭12人しかいませんでした。信徒は何人ぐらいいたでしょうか。きっと多くはなかったでしょう。函館での宣教はまだ始まったばかりです。

報告文の前半は1人の洗礼に秘められた神の恵みとのお計らいに対して感謝の念で溢れています。後半ではアルムブリュステル師は信徒の数に気を落とさず、洗礼の秘跡に伴う恵みに希望をかけています。ここで引用した最後の部分は非常に興味深いと思います。アルムブリュステル師は数少ない外国人宣教師には手の届かないことが山ほどあるとよく認識しているようです。

本人も来日してから二年しか経っていない。彼は福音宣教の難しさ、言葉の問題、政治状況の不安定などについて強く感じていました。他の文書で不安を隠さずにつぶやきのようにそれを書き残しています。結局、福音宣教の様々な問題に答えるために新信者が「使徒」にならないと困ります。パウロとフランシスコ・ザビエルのような使徒に。

そういう思いをもってアルムブリュステル師は新潟での布教の可能性を探るために命をかけて来ました。残してくださったその手紙に溢れ出る感謝、期待、確信は素晴らしい信仰の遺産と言えるでしょう。そして、現代に生きる私たちに対し耳の痛いほどの力強い問いかけでもあります。

私たちは信者になったことによって使徒にもなったということをごどれほど意識し、理解しているでしょうか。

[1]2014年「双塔 王であるキリスト号」

そよかせ便り

■ 聖体賛美式（キリストの聖体 祭日） ----- 6月7日（日） -----



び掛けられ、ご聖体を顕示し、「聖体賛美式」が行われた。

爽やかな日曜日。祭壇には白い紫陽花が活けられ、「キリストの聖体」の祭日のミサが、ラウル神父様の司式で捧げられた。神父様は説教で「神様がいのちの恵みを私たちの器に入れてくださるのに、私たちの器は穴だらけ」、「でも、イエス様の器は完全で、漏れることなくいっぱいになっている。私たちはイエス様のところに行くだけで、試練を乗り越え、生きる力を頂ける」と話された。聖体拝領後に「ゆるしを自分のため、家族のため、社会のために祈りましょう」と呼

■ キリスト教一致に関する講演会 ---- 6月14日（日）15:00 ----

新潟市キリスト教連合会の主催の講演会には、市内のキリスト教諸教派から60名ほどが参加講師は上智大学神学部で教鞭をとる光延一郎師（イエズス会）。新潟にはあまり縁のない方かと思いきや、たびたび新潟を訪れているとのことで、講演は和やかな雰囲気であった。

テーマは、カトリック側からみたエキュメニズムということで、①第二バチカン公会議と公会議の開催を決定した聖ヨハネ二十三世について、② 公会議文書の紹介と『エキュメニズムに関する教令』について、③ 今後のエキュメニズム運動の展望——が紹介された。

新潟は、故佐藤敬一司教様が司教団の中でエキュメニズム担当司教をされていたこともあり、全国的に見てもプロテスタント教会との交流が比較的盛んな地域でもある。講演後には質疑応答の時間も設けられ、熱のこもった90分間であった。

